

ホラー鑑賞の恐怖と楽しみは 複雑な気持ちとして説明した方がよかったのではないか

源河 亨 (日本学術振興会・東京大学)

『恐怖の哲学』第I部ではジェシー・プリンツの情動理論が紹介され (Prinz 2004 Gut Reactions, 『はらわたが煮えくりかえる: 情動の身体知覚説』源河亨訳、勁草書房)、第II部ではそれを応用してホラー鑑賞の情動が分析されている。本発表の目的は、実のところ第II部の主張はプリンツの理論と相性が良くないと指摘することである。

プリンツの情動理論は旧来の身体説の欠点を補うものである。情動は身体状態の知覚だと主張する身体説 (ジェームズ-ランゲ説など) には、情動が捉えている対象をうまく説明できないという欠点がある。たとえば恐怖は、クマや毒ヘビや火事といった恐怖を引き起こす個別的な対象に共通する〈身の危険〉を捉えている。だが、身体状態を知覚してわかるのは鼓動や筋肉に関する情報であって、それでは危険が迫っていることの認識には至らないのではないか。この点を補うためにプリンツはドレッキの情報理論を援用している。動悸や筋肉の緊張といった身体状態は、身の危険によって信頼のおける仕方で引き起こされる反応であり、また、身の危険への反応として生じるために進化的に備わったものである (身の危険によって引き起こされることが「本来の機能」である)。すると、ドレッキ流の考えに基づくと、そうした身体状態はそれを引き起こした身の危険についての情報を担っていることになる。そうであるなら、そうした情報を担う身体状態を知覚すれば身の危険についての情報が得られると考えられるだろう。

この点を踏まえて本発表で問題としたいのは、『恐怖の哲学』第7章「なぜわれわれはホラーを楽しめるのか」の議論である。戸田山によると、恐怖を与えるホラーをわれわれが楽しめることを説明する際には、「怖いがゆえに魅力的なのはなぜか」を説明する必要がある (p.304)。つまり、怖さと楽しさを単に同時にもつというタイプの説明では不十分であり、怖さがあるからこそ楽しみが生じるというタイプの説明が必要だということだ。ここから戸田山は、恐怖は不快なものだという素朴な直観を否定し、恐怖は快でもありうることを主張する。「恐怖の身体的反応は、要するにアドレナリンがドバーと出て (adrenaline surge という) 交感神経系が興奮するということだ。これは、他の激しい情動とも共通している。覚醒の度合いが高まり、興奮状態になる。これは、文脈によっては快感としても感じられる状態だ」 (p.334)。

この主張の問題を理解するためには、情動に備わる快・不快というパラメータ (感情価 valence) は行為に関わるという点を考えるのがいいだろう。喜びや高揚といった快の価をもつ情動は、それを生じさせた対象との相互作用をなるべく持続させる行為を促し (たとえば、曲を聴いて楽しくなったらなるべく曲を聴き続けさせる)、怒りや悲しみは原因となる対象の回避を促す (ひどいと思ったら曲を止めさせる)。この点と、恐怖は身の危険を表象しているというプリンツの見解、そして、恐怖は快でもありうるという戸田山の主張を合わせると、恐怖は身の危険を持続させる行為をわれわれに促す場合があるという主張が導かれるだろう。だがこれは不可解である。なるべく危険な状態でいようとする理由はよくわからないからだ。さらに、プリンツの情動理論がドレッキ流の「本来の機能」の考えをベースにしているという点を考慮すると、戸田山

の主張はさらに不可解になる。恐怖は、その一側面として、身の危険を持続させるために進化的に獲得されたものだという事になってしまうのだ。

ここで戸田山は次のように応答するかもしれない。恐怖は身の危険の回避を促すものだが、回避行動のためにはアドレナリンの分泌などの興奮状態が必要となる。そしてその興奮状態は、快に感じられる身体状態とたまたま重複しており、場合によっては快として経験されるのだ、と。つまり、恐怖の快は身の危険に対する反応ではなく、身の危険に対する反応（回避行動を備える身体状態）に伴う副産物だということだ。この場合、「ホラーが、怖いがゆえに魅力的なのはなぜか」という要件の「ゆえに」は、〈人は怖がるとアドレナリンがたくさん出るようにできている〉というように、人が現にもつメカニズムに訴えて説明されることになるだろう。

だが、われわれがもつメカニズムの副産物として恐怖の快を説明するなら、他にもいろいろやり方はある。とくに本発表は、プリンツが「情動の相反過程」を使って説明しているスカイダイビングのケースに基づいた代替案を提示したい。相反過程を大雑把に言うと、ある情動が強く経験された場合、その反動として反対の情動が強く経験されるというものである。スカイダイビングの場合、上空から落下するすさまじい恐怖から解放された後でとてつもない喜びがやってくるが、この喜びは単独で経験された喜びとは異なり、恐怖があることで成立するものである。これと同じく、ホラー鑑賞の喜びは、恐怖の反動として生じた喜びと言えるかもしれない。ホラー鑑賞の情動は不快である恐怖と快である喜びを同時にもつ〈複雑な気持ち〉なのだが、その喜びは恐怖がなければ経験されなかった、「怖いがゆえに」経験されたものだと言えるのである。